

シカゴ双葉会日本語学校全日校での英語教育の実践を通して

前シカゴ双葉会日本語学校全日校 教諭

北海道小樽市立朝里中学校 教諭 金澤 朋宏

キーワード 在外教育施設、シカゴ、英語教育、現地理解教育

赴任校の概要 (2024年3月31日現在)

学校名・日本語: シカゴ双葉会日本語学校全日校

学校名・現地表記: Chicago Futabakai Japanese School Day School

URL: <https://chicagojs-next.edumap.jp/>

1 はじめに

2021年度に赴任してからの3年間、幼稚部・小学部・中学部の英語教育全般に関わり、中学部英語授業の他、クラス分けや教員配置、交流学习の調整や新英語科教員の採用担当など幅広く活動する機会をいただいた。シカゴ双葉会日本語学校全日校は、英語教育を特色ある学校づくりの柱の一つとして掲げており、様々な取り組みを行っている。その中で、それぞれの事情で日本や現地校から来た児童生徒たちが「英語を学ぶ意義を見出し、主体的に学ぶ姿勢を身に付けるためにはどのようなことができるのか」ということを、いつも念頭に置きながら全ての活動に取り組んできた。ここでは自らの視点を通して実践してきた英語教育の取り組みと、現地校との交流を通してどのような気づきを得られたかについて述べてみたい。

2 シカゴ双葉会日本語学校全日校の英語教育について

(1) 英語教育の特色

英語部は、派遣教員1名とネイティブ教員5名の計6名で構成されており(2023年度現在)、幼稚部から中学部までの英語に関わる教育活動に幅広く携わっている。特色として、以下の4点において本校独自の取り組みを行っている。

1つ目は、文部科学省の学習指導要領に準拠した英語指導である。海外にいながら準拠教科書を使用し、日本国内と同等の教育環境での授業を行い、日本の入試制度にも対応した授業を行っている。

2つ目は、ネイティブ教員による第2言語としての英語(ESL)教育を取り入れた授業を行い、英語の活用を重視した実践的な授業を行っている。さまざまな英語表現を身に付け、実践的場面に即した様々な授業が提供されている。

3つ目は、英語授業時間数の確保である。小学部では各学年週4回、中学部では週5回の授業が行われ、日本国内と比較しても圧倒的に英語を学ぶ機会が多く、さらには交流学习や校外学習を通し、様々な場面で英語を活用する機会が保障されている。

4つ目は、習熟度に合わせてクラス編成がなされ、各レベルに合わせたきめ細やかな支援がなされていることである。在籍する児童生徒は、米国滞在歴が長く現地校での生活を経験した子どもたちから、渡米して初

めて英語に触れる子どもたちまでと幅広い。そのような様々な学習履歴を持つ児童生徒が、自らの実力に合わせて着実に実力を伸ばしていけるようにクラス編成をし、様々な手法を用いた授業を行い、英語力の育成を図っている。

上記に加えて、アメリカ国内3か所のみで受験できる実用英語技能検定が本校を会場としている点も特色である。

(2) 英語部の主な取り組み

① 英語図書コーナーの設置・活用

英語を身近に感じる機会の一つとして、読書の推進を行っている。ネイティブ英語教員の働きかけがきっかけとなり、現在では数千冊の蔵書数となっている。絵本から大人向けの洋書まであり、レベルに応じて児童生徒たちが自ら好きな本を選び、授業前の時間に読んだり、借りたりすることもできる。ほとんどの本は寄付によるもので、この活動が保護者や地域の方のサポートに支えられていることを児童生徒たちも実感している。また読書スペースは、他学年との交流の場としての機能も果たしている。

② 幼稚部のクラス編成

幼稚部は年少・年中・年長の3クラスがあり、全てのクラスで英語活動を行っている。2022年度より幼・小の連携を視野に入れ、年中は週1回から週2回、年長は週1から週4回にクラスを増やして活動している。英語が身近な言語として親しめるようネイティブ教員と触れる機会も意図的に多く設けている。

③ 小学部の連学年によるクラス編成

他教科の多くは単学年での授業が中心だが、英語の授業は1～2、3～4、5～6の連学年で編成され、各児童の達成度に合わせ4～5クラスが設定されている。また学校祭などの行事では、連学年全員でひとつのテーマに沿って活動する時間を設けている。学年を超えて共に同じ達成目標を目指して少人数で学び合える環境は、信頼関係を育み、安心して学べる場となっている。

④ 中学部の縦割りクラス編成

日本の学習指導要領に準拠した授業を英語Ⅰ、ネイティブによるESLの授業を英語Ⅱとして、年間185時間、週5回の英語授業が設定されている。2023年度より、英語Ⅱの授業を中学部1年から3年を縦割りにし、4つのクラス編成とした。小学部のクラス編成と同様、学年よりも英語の達成度を優先したことで、共に学ぶという意識が高まり、学年ごとのクラスとは異なった連帯感が見られるようになった。

⑤ 交流学习

毎年、小・中学部の各学年が1～2校との交流を行っている。昨年度からは対面での交流も可能になり、基本的に相手校への訪問と受け入れの合計2回の交流を行っている。(相手校が2校の場合は4回) 日本文化の紹介などの様々な活動を通して、英語で表現することの楽しさや難しさを学びながら、異文化理解やコミュニケーションスキル向上の一助としての貴重な機会となっている。特に受け入れの際には、パートナーに喜んでもらうために何ができるか、日本のどのようなことを伝えられるか、英語でどのように話をすれば上手く伝わるかなど、相手を思いやる意識が高まっていた。他者への思いが先行し、その思いを伝える手段として英語を用い、結果として英語力の向上につながるという環境がある。

⑥ 地域との交流 (小学部)

コロナによる制限が緩和された赴任2年目より、地域交流イベントとして校舎向かいの教会にてコンサート

を行った。日頃の英語の学習成果を発表する機会として、また地域の方と交流の場として過年度にも毎年実施されていた。英語での発表（歌）を現地の方々が楽しんでくれている姿を体感することで達成感や自信を深めていた。さらに対話を通して「自分の言いたいことが英語で伝わった!」という体験や、地域の方々の優しいまなざしや言葉がけが大きな喜びとなり、英語の学びを促す大きな原動力となっていた。

⑦ ネイティブ英語教員の授業力

在籍するネイティブ教員のほとんどは、英語指導助手（Assitant Language Teacher）として日本に滞在し、英語指導の経験や日本語を学んでいた経験がある。そのため、他言語を学ぶことの面白さや苦勞を知り、児童生徒たちに対して共感的に接することができ、一人ひとりとの信頼関係を土台とした授業によって、英語力の向上が図られている。

⑧ 実用英語技能検定（英検）の実施

年に3回の受験機会があり、2022年度は小学部81%、中学部は92%が取得している（延べ人数）。英検取得が英語学習のひとつの動機となっており、さらに低学年でハイレベルの級を取得している児童が身近にいることで、それが自らの意欲づけになっている。英語圏に暮らす児童生徒たちにとって英語ができるようになることは特別なことではなく、当たり前のように学ぼうとする姿勢が見られた。

3 現地校（交流相手校・訪問校）の様子から一学びの集団を作る工夫について

オンラインでの交流に制限されていたコロナ禍を過ぎ、2年目からは対面での交流が可能になり、小学校から高校まで複数の学校を訪問する機会を得た。また、相手校の先生方の協力により、学びの機会として学校の訪問が許可され、施設や授業の様子を見学することができた。これまでの交流や訪問を通して、学びを促す環境づくりという点から着目したことについて触れる。

(1) サポート体制について

英語が母国語ではなく、様々な文化的背景を持つ児童生徒が在籍していることが当然の環境の中、一人ひとりに学びの機会を保障し、支援する体制が組織として機能している。

① 言語面でのサポート

イリノイ州では、英語を母語としない児童生徒の英語運用能力を測る基準として、ACCESSというアセスメントテストを採用している。このテストでサポートが必要と判断された場合には、英語学習者として、会話や文字、フォニクスなど英語習得に特化した授業を受ける。またクラスの担任と英語担当教員が連携することで、クラスへのスムーズな適応を図っている。訪問した小学校では、個別にプログラムが生まれ、通常授業カリキュラムと調整をしながら、1人から2人の少人数による英語授業が確保されていた。

② 保護者の関わり

交流などを通し、ボランティアスタッフとして参加している保護者と接する機会がたびたびあった。あらかじめ業務内容やボランティアとして働くことができる曜日等を登録し、必要に応じて様々な活動に関わるということが定着しており、学校の教育活動を支えるための大きな役割を担っている。

(2) 学びの集団を作る工夫について

様々な文化的背景や宗教的信念、家庭環境を持つ児童生徒たちがいる中で、学ぶ意欲を高め、学習を促すための様々な工夫や取り組みがされている。

① 学校のシンボル

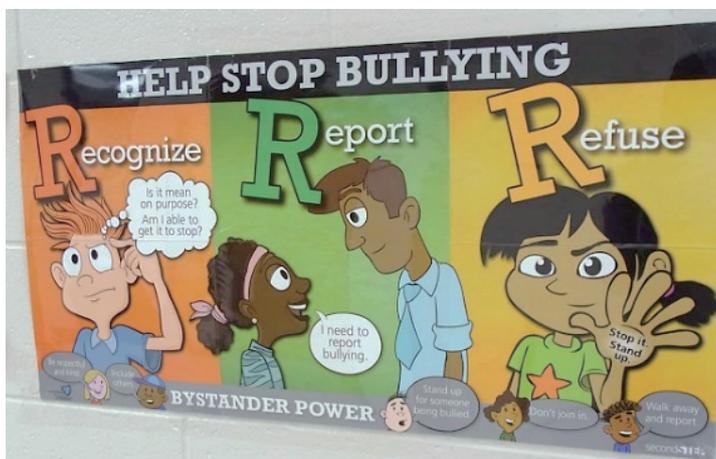
訪れた学校に限らず、多くの学校にはその学校を象徴するキャラクターが設定されており、自らの学校に対する帰属意識を強め、自尊心を育むために機能している。多様な価値観を、シンボルを通してひとつにまとめようとする方法は、アメリカという国の姿の一端を象徴している。



交流相手校のシンボル

② 規範意識や学習規律について

小中高の校種を問わず、児童生徒の目につきやすい廊下やホールには多くのポスターが掲示されており、それらの多くが学校生活を送るうえで大切な規範意識や学習に対する意識向上に焦点を当てた内容のものであった。日本の道徳に近い教科として、アメリカでは、市民としての心構えや自分の感情との付き合い方、他者との関わり方などのソーシャルスキルを身に付けるといった「Character Education（人格教育）」が実施されており、多様性を市民教育という観点でひとつにしている。



小学校廊下に掲示されていたポスター：行動規範や、いじめ防止の啓蒙を「STAR」、「3R」などと頭文字で表したり、イラストを用いたりしながら、規範意識を育んでいる。

4 終わりに —シカゴ双葉会日本語学校と現地校との比較から見えたこと—

現地校との交流や訪問を通じて、学びを促す学習環境とは「自分の居場所に誇りを持って学ぶことができる環境」ではないかと考えるようになった。様々な文化的背景や宗教的信念を持つ子どもたちにとって、学校生活は毎日が異文化交流、異文化理解の連続である。学校という場所で毎日をクラスメイトと共に過ごす中で、学校生活そのものが彼らにとっての文化となっていく。これまで訪問した学校には、それぞれの学校文化を醸成するために様々な工夫がされており、それらは全て自分たちが所属するものへの「誇り」を持たせるための取り組みであるように感じられた。そして、自分が所属するものへの誇りを持たせることを通して、一人ひとりの自尊心を育み、それが学ぶ意欲へとつながっているのではないかと考える。

その意味においては、交流活動等を通して、双葉会という学校への帰属意識を高めたり、アメリカで英語を学んでいるという自負心から英検取得に励んだり、学校ならではの取り組みが学ぶ意欲へとつながるきっかけになっているという認識を持つことができた。

また現地校訪問を通して、放課後に学位取得のために学校へ通う教師が多くいるという話を伺った。アメリカの小・中学校教諭の約半数が大学院修士課程を修了しているというデータ（National Center for Educational

Statistics)もある。まず教師自身が学び続ける意欲と、教育者としての自身の職と役割に誇りを持って教育活動を行うことの大切さに改めて気付かされた。

「所属する学校への誇り」と「自らの自尊心を高める」という視点で学習環境を捉えた時、日本の学校の学習環境の中でも様々な取り組みができるのではないかという可能性と見通しが見えてきたことで、自身の学ぶ意欲にもつなげることができた。これらの経験を通して得たことは、決して自分自身だけのものではなく、様々な場面に活かしてこそ価値に代わっていくということを肝に銘じ、今後の教育活動につなげていきたい。